

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	岩 坂 泰 子
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学教授）吉田達弘 副主査：（上越教育大学教授）大場浩正 委 員：（鳴門教育大学教授）山森直人 委 員：（兵庫教育大学教授）吉川芳則 委 員：（上越教育大学教授）松本健義
3. 論文題目	Studies of Japanese Elementary School Pupils' Foreign Language Development: Integrating Multimodality into Sociocultural Theory（日本の小学生の外国語発達の研究：マルチモダリティを社会文化理論に統合した理論的枠組みを用いて）
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻言語系教育連合講座 岩坂泰子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記の通り審査を行った。 論文審査日時：令和4年2月24日(木)10時40分～11時40分 場所：Zoomによるオンライン実施 1. 学位論文の構成と概要 本論文は以下の8章から構成される。 Chapter 1（イントロダクション：研究の目的と背景） Chapter 2 SCT in SLA Studies (SLA研究におけるSCT) Chapter 3 Role of Emotions from a Sociocultural Perspective in SLA Studies（社会文化的視点によるSLA研究における感情の役割） Chapter 4 SCT from a Multimodal Perspective（マルチモーダルな視点によるSCT） Chapter 5 Research Method（研究の手続き） Chapter 6 Case Study One（事例1） Chapter 7 Case Study Two（事例2） Chapter 8 Pedagogical Significance and Implications（教育学的意義と示唆） 各章の概要は以下の通りである。 本研究の目的は、第二言語および外国語学習研究において注目されている社会文化理論を基盤としながら、マルチモダリティ理論の観点を援用することで、言語やイメージといったリソースの活用が、英語を外国語として学ぶ児童たちの言語発達に、どのように寄与しているかを明らかにしたものである。 第1章では、本研究の背景や研究の目的について述べた。新学習指導要領により、外国語科・外国語活動が小学校に導入されたが、授業実践の中で見られる課題を指摘し、本研究を開始する動機や背景が説明された。 第2章では、本研究の基盤となる言語発達理論として社会文化理論を概観した。社会文化理論は、ロシアの心理学者ヴィゴツキーの発達理論を源泉とし、子どもの発達は学習者が置かれた社会的関係の中で、他者や物理的道具による媒介を通じて起こるとするが、この考え方は、1990年代以降、第二言語学習研究でも一つの流れを作っている。本章では、その鍵概念となる媒介、内化、発達の最近接領域（ZPD）について概説した。

第3章では、社会文化理論のもう一つの鍵概念として「感情的体験(ペレジバーニエ)」に注目した。これまでの第二言語学習研究では、感情は認知活動と切り離され、言語習得上、補助的な役割として見なされてきたが、本章では、この二分法を批判的に捉え、むしろ両者が分かちがたい関係にあることを強調した。そして、社会文化的環境の中で一人ひとりにユニークに生起する感情的体験（＝ペレジバーニエ）こそが認知活動を活性化させることを概説した。

第4章では、言語発達における様々なリソースの媒介性についてさらに理解を深めるためにマルチモダリティ理論を援用し、児童の感情的体験の表出を詳細に検討した。マルチモーダル研究に基づくリタラシー教育の目的は、「画像、文章、音楽、ジェスチャー、スピーチ、動画、サウンドトラック、3Dオブジェクト」（Kress, 2010,p.79）などの「モード」の中から学習者が「意味のデザイン（形式）」（NLG, 2000, p.19）を創造的に作り出すことにある。本論文では、マルチモダリティ理論を社会文化理論に統合し、学習・発達は、学習者の「感情体験」が、発達の最近接領域の中で起こる様々なモードの媒介による「意味生成の行為」を通して知覚（認知）され、活性化されることによって起こると主張した。

以上のような理論的背景を元に、続く3つの章では、二つの小学校の英語授業でおこなった事例研究から、児童たちの言語発達の過程を明らかにした。第5章では、研究手法について概説した。事象から一般化を目指す研究方法ではなく、マルチモーダルディスコース分析という手法を用い、教室の中で生起する事象や学習者の発達における複雑なプロセスを検証する質的な手法を採用した。また、対象となる二つの小学校での事例の文脈、参加者について記述された。

第6章では、事例1として、公立小学校5年生を対象に行われた外国語活動の実践を分析した。この実践では、児童たちは、英語絵本を使った活動の中で、shareという新規に出会う語の意味を理解するように促され、さらに、言葉の意味に対する個人的な理解をマルチモーダルに表現するために、自分が「誰かと共有したものを絵に描く」という課題が与えられた。児童が描いた絵と教師との間で交わされた会話や話された英語を分析し、彼らがshareという語の個人的な意味をどのようにマルチモーダルに表現しているのか、また、この時、彼らのペレジバーニエが意味生成にどのような影響を与えているのかを分析した。

第7章では、事例2として、別の公立小学校6年生を対象に、図画工作科と外国語の教科横断的な授業実践が行われた。児童は、小学校時代で最も印象に残っている行事を英語で発表する課題に取り組む際に、その思い出を図工で学習した芸術家マティスの切り紙絵の手法を使って表現した。分析の結果、児童が、英単語を入れ替えた単純なパターンを発表するのではなく、彼らの感情体験（ペレジバーニエ）が、言語と切り絵というマルチモーダルに表現され、それを教師や他の児童たちが読みとくなく、児童の発達の最近接領域が構成され、児童たちの言語発達が促されたと解釈した。

第8章では、本研究の新規性と教育学的示唆について述べて、全体を締めくくった。

2. 審査経過

(1) 研究の独創性及び発展性について

本研究の独創性は、小学校での児童の外国語発達を社会文化理論でとらえ、さらに、児童が活用するリソースの媒介性を深く理解するために、マルチモダリティ理論を統合した点にある。教室での児童や教師のやり取り、リソースの活用を質的方法によって分析し、統合理論による説明を試みている。こういった見方は、外国語学習研究の新たな方向性を示すものであり、今後、教室でのデータをさらに収集していくことにより、異なる文脈の外国語教育実践へも転用が可能な理論および実践の枠組みの提案につながることが期待される。

(2) 学校教育実践への貢献、社会への貢献について

本研究は、社会文化理論とマルチモダリティ理論を基盤に、実際の授業実践を申請者自身が計画・実施している。学校教育における授業実践の取り組みとともに、その実践をとらえるための視座も明らかにしているという点で、学校教育実践へ貢献度は大きく、今後、小学校で使用されている教科書などを用いて研究を重ねていくことで、現在の小学校での英語教育が抱える課題の解決に寄与するものと考えられる。

3. 審査結果

以上により，本審査委員会は，岩坂泰子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し，全員一致で合格と判定した。